

教育制度論（新課程）の授業評価と授業時間外学習の促進 －平成 26 年度と平成 27 年度との比較－

教育学専修 露口健司

I. 授業目標と内容

本授業の目標は次の 2 点である。すなわち、①教育の社会的、制度的又は経営的な事項についての基礎概念を理解し、説明できること、②今日の教育政策・教育改革の動向についての理解を踏まえ、それらの意義・効果や問題点について、自らの考えを論述・表現することである。DP については、主として「2A 教育をめぐる現代的課題」「2B 教育の現代的課題への対応方法」に対応している。

授業内容等についてはシラバスに明記する通りである。教育目標、教育課程、教科書制度、教員の服務、教員研修、教育委員会制度、学校経営等を、法律の視点から理解する授業となっている。『教育のための法学』（ミネルヴァ書房）という、筆者も作成に参加した教科書を使用している。

学習形態は、①課題提示（5 分）、②講義（45 分）、③個別活動（10 分）、④グループ協議（15 分）、⑤全体発表（10 分）、⑥まとめ（5 分）の構成としている。言語活動を豊富に取り入れたアクティブラーニング型の授業となっている。

II. 本年度の授業課題

平成 27 年度は、昨年度十分ではなかった教室外学習の定着に焦点をあて、授業を実施した。なお、授業の内容と方法は、昨年度抜本的に変更しており、本年度は基本的に平成 26 年度とほぼ同様である。最大の相違点は、教科書に基づく予習を、授業終了時に明確に指示すると共に、毎回の授業開始時に、予習の状況を学生に相互確認させる場面を採り入れた点である。もちろん、本授業の中核 DP である、「2A 教育をめぐる現代的課題の理解」や「5A 専門的職業人としての使命／責任感の自覚」についても重点的に取り組んでいる。

III. 授業評価の方法

平成 26 年度は第 15 回目の授業終了時に、平成 27 年度は 13 回目の授業開始時に DP 対応学生認識調査を実施したところ、次頁の表 1 に示す結果が得られた。平成 26 年度は作業途中でチャイムが鳴ったため、自宅での入力を可とした。これが原因と思われるが、回収率が 50%程度（回答 42 名/受講 85 名）となってしまう。平成 27 年度は、この反省を踏まえ授業開始時に実施したところ、入力率は 77%（回答 59 名/受講 77 名）に上昇した。作業に手間取り、10 分で入力できなかった学生が回答を放棄したものと考えられる。

IV. 結果

調査結果の比較分析から読み取ることが出来る成果として、以下の 3 点を指摘したい。

第 1 は、本授業において最も重要な DP である「2A 教育をめぐる現代的課題」の肯定率が 100%であり、なおかつ、最高評価「1」を選択した学生が 81%から 85%に上昇している。本授業を通して DP の主旨はおおむね達成できたといえる。

第 2 は、「5A 専門的職業人としての使命／責任感」の肯定率が 98%（昨年度同様）であり、最高評価の学生が 55%から、63%に増加している点である。授業の中盤では、特に、教員の服務・倫理・研修等についての学習を集中的に行っており、学習の成果として素直に捉えたい。

第 3 は、1 時間程度学習する学生が、40%から 63%へと増加している点である。予習をしておかないと授業の理解は困難となるため、多くの学生は予習を行う。また、ワークシートの感想欄に書き込む作業を自宅で行う必要があるため、学生は復習も自宅で行わねばならない。こうした授業設計上の工夫が、1時間程

度の家庭学習時間の確保につながっていると考えられる。

V. 調査に示された課題

本授業の中核 DP である「2A 教育をめぐる現代的課題」や「5A 専門的職業人としての使命／責任感」の得点は上昇しているが、それ以外の得点は大幅に低下している。肯定率の大幅な低下は認められないが、「1」を選択する学生が減り、「2」を選択する学生が増えている。昨年度は、回収率が低く、真に意欲的な学生のみが回答した可能性が高い。本年度、回収率が 1.5 倍となる中で、標準的な意欲の学生も回答した結果ということであろう。結果に表れない、未回答である約 25%の学生の動向が気になるところである。

また、教室外学習 1 時間の学生が増えたといっても、それでは教室外学習の時間としては十分とはいえず、今後のさらなる工夫が必要である。1 時間程度学習する学生は増えたが、教室外学習時間の平均値は低下している。昨年度は、2 ～ 3 時間の学習者が複数おり、これらの者が平均点を上げていたが、本年度はこうした学生が少ないことが理由であると考えられる。回収率の増によって、平均値がほとんど影響を受けていない点は、評価できる。

VI. 試験準備をしていない学生の存在

本授業では、毎回の授業において最も重要であり、なおかつ教員採用試験において問われる確率が高い 14 問の記述試験を最終回に実施している。評価テストは 40 点満点であり、その結果は図 1 に示す通りである。毎回出席し、評価テストの準備をしている学生は、満点をとっている。一方、25 点あたりを下回る学生は、試験に向けての準備ができていない。出席しているが、授業内容をほとんど理解していない者もいる。教職に向かう姿勢を疑いたくなる。こうした学生への対応が、次年度以降の課題である。

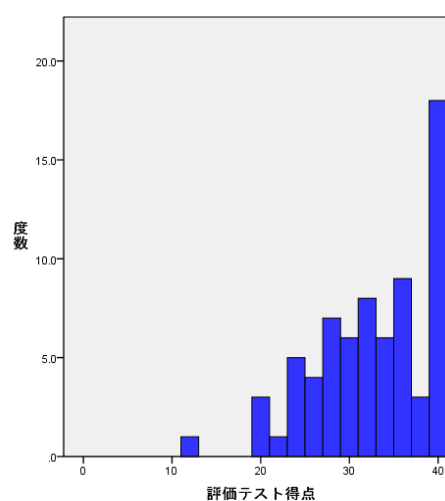


図 1 評価テスト結果のヒストグラム

表1 DP 対応学生認識調査結果の度数分布 (%) と肯定率

	1	2	3	4	肯定率	
1A 教育に関する確かな知識	83 (88)	17 (12)	0 (0)	0 (0)	100 (100)	
1B 自分の専門分野の知識	61 (67)	22 (26)	14 (5)	4 (2)	83 (93)	
2A 教育をめぐる様々な現代的諸課題	85 (81)	15 (19)	0 (0)	0 (0)	100 (100)	
2B 教育の現代的課題への対応方法	56 (81)	42 (19)	2 (0)	0 (0)	98 (100)	
3A 教育活動に取組むための技能	56 (76)	37 (21)	5 (2)	2 (0)	93 (97)	
3B 教育活動に取組むための表現力	51 (71)	44 (26)	2 (2)	4 (0)	94 (97)	
4A 自己の学習課題の明確化	46 (67)	49 (33)	2 (0)	4 (0)	94 (100)	
4B 理論と実践を結ぶ主体的学習	44 (57)	46 (40)	8 (2)	4 (0)	88 (97)	
5A 専門的職業人としての使命／責任感	63 (55)	36 (43)	2 (2)	0 (0)	98 (98)	
5B 多世代にわたる対人関係形成力	41 (43)	51 (41)	6 (7)	4 (10)	90 (84)	
	0	0.5	1	2	3	M/hrs
授業外学習 (課題)	2 (5)	29 (36)	63 (40)	7 (10)	0 (10)	0.91 (1.06)
授業外学習 (自発)	31 (31)	29 (26)	36 (29)	4 (10)	2 (5)	0.62 (0.75)
	0	1	2	5	M	
自発的読書	81 (81)	15 (10)	4 (10)	—	0.22 (0.29)	
自発的活動	85 (90)	8 (7)	5 (2)	2 (0)	0.27 (0.12)	

註)カッコ内は平成 26 年度の得点。